

「主イエスはダビデの子か」

2014年10月30日

マルコによる福音書 12章 35節～37節。 イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』」このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

上記に記された主イエスの言葉は、とても主イエスご自身が語ったものとは思えない。マルコ福音書の著者が、メシアはダビデの子ではない、即ち、主イエスはダビデとは質を異にする方であるということを主張して書かれた記述であろう。次のように展開している。

エルサレム神殿当局は、主イエスを陥れようと論争を仕掛けてきたが、ことごとく敗退した。もはや、質問する者もいなくなった。そこで、主イエスの方から語りかけた。律法学者たちは「メシアはダビデの子だ」と言っている。当時、ダビデ王朝の再来を期待してメシアはダビデの子孫から現れると言われていた。しかし主イエスは、詩編 110 編 1 節の「主は、わたしの主にお告げになった。わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」という言葉から、メシアはダビデの子ではないと語った。

詩編 110 編は「ダビデの詩」となっている。これをふまえ「主は、わたしの主にお告げになった」を「主＝神は、わたし＝ダビデの、主＝メシアにお告げになった」と受け止めている。ダビデ自身がメシアを「わたしの主」と呼んでいる。そうならば、メシアはダビデの子ではあり得ないという論法である。

詩編 110 編は、王の即位式で歌われた賛歌である。正しくは「神は、わたし（詩編の著者）の王にお告げになった」である。その即位した王は神の右に座り、敵を足もとに屈服させる王であるとほめたたえた言葉である。この詩編を、神、ダビデ、メシア（主）と言い換えている。今日から見れば、めちやくちやな理解であるが、マルコ福音書の著者は旧約聖書の言葉をそのように解釈している。新約聖書には、旧約聖書を自由に解釈し、引用しているケースがしばしばある。

要は、メシアはダビデの子と言われているが、ダビデはメシアを「わたしの主」と呼んでいるから、メシアはダビデの子ではない。すなわち、主イエスはダビデの子ではなく、ダビデを超えた「神の子」と言いたい訳である。主イエスが言われた言葉ではないが、著者は真顔で主張している。

聖書には「主」という言葉が多く記されている。「主」は「あなた様」という相手への丁寧な二人称でもあり、「王」という意味もある。ローマ皇帝は「主」と言われた。キリスト教はナザレのイエスを「主・キリスト」と信じる信仰である。この「主」は生と死をかけて、信じ、従う「神」であるという意味である。バルメン宣言の第一項に「聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一のみ言葉である」と告白されている。この告白は台頭してきたヒトラーへの不服従を意味していた。マルコ福音書の著者は、この信仰を伝えたいと、主イエスの口に乗せたのである。読者に「アーメン」と唱和することを求めている。その信仰が人を真に生かすからである。